

はじめに

竹本真希子

広島市立大学広島平和研究所ブックレットの第六号となる本書は、広島平和研究所が二〇一八年度に開催した国際シンポジウムと二〇一七・一八年度に開催した連続市民講座の講演内容をまとめたものである。シンポジウムと市民講座は、大きく内容が異なるため、二部構成としている。

第I部は「核兵器禁止条約の展望と課題」と題し、二〇一七年度後期の市民講座と、二〇一八年夏に開催された国際シンポジウムの内容をまとめた。

二〇一七年に国連で採択された核兵器禁止条約と同年の核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）のノーベル平和賞受賞は、核兵器廃絶を求める国際NGOや日本の被爆地・広

島、長崎の市民などのこれまでの努力の成果だと受け止められた。それと同時に、核兵器保有国がこの条約に反対するなど、核兵器をめぐる多くの課題を改めて示すものとなった。加えて最近では、朝鮮半島の非核化の議論が進展し、同時にドナルド・トランプ米大統領が中距離核戦力（INF）全廃条約の破棄を表明するなど、核兵器をめぐる情勢が再び動き始めている。

本章では、こうした核兵器をめぐる近年の議論を振り返りながら、核兵器禁止条約が核兵器のない世界の実現へ向けて、力を発揮しうるのか、その条件は何か、あるいは核兵器保有国や「核の傘」の下にいる国々の反対や非協力を克服する方法はあるのかといった問題について、今後の展望と課題を探っている。市民講座およびシンポジウム後の新たな情報も踏まえた、わかりやすい解説となっている。核をめぐる問題と最近の動向については、本書以外にも、近著である広島市立大学広島平和研究所（編）『アジアの平和と核 国際関係の中の核開発とガバナンス』（共同通信社、二〇一八年）で取り上げている。本書が市民向けの解説を目指したものに対して、『アジアの平和と核』は学術的な本であるが、内容的には深く関連しているので、ご覧いただければ幸いである。

第I部のもとになっている市民講座および国際シンポジウムは、以下のとおりである。

二〇一七年度後期 連続市民講座「核兵器禁止条約の展望と課題」

日時 二〇一七年一〇月一日～一月八日（毎週金曜日） 一八時三〇分～二〇時三〇分

会場 合人社ウエンデイひと・まちプラザ（広島市まちづくり交流プラザ）

第一回（一〇月一日） 孫賢鎮（広島市立大学広島平和研究所准教授）「核兵器禁止条約から見た北朝鮮の核・

ミサイル問題」

第二回（一〇月一八日） 福井康人「国際法の下での核兵器禁止条約」

第三回（一〇月二五日） 川崎哲「核兵器禁止条約と市民の役割」

第四回（一一月一日） 小溝泰義「核兵器禁止条約の展望と平和首長会議の提案」

第五回（一一月八日） 水本和実「核兵器禁止条約と日本の役割」

国際シンポジウム「平和への扉を開く——核兵器禁止条約と、これから」

日時 二〇一八年七月二二日（日） 一三時三〇分～一六時三〇分

会場 広島国際会議場 地下二階 ダリア

主催 広島市立大学・中国新聞社・長崎大学核兵器廃絶研究センター

後援 広島市・（公財）広島平和文化センター

基調講演者 ティム・ライト（核兵器廃絶国際キャンペーン（ICAN）条約コーディネーター）

パネリスト 遠藤誠治（成蹊大学法学部教授）

鈴木達治郎（長崎大学核兵器廃絶研究センター長・教授）

金崎由美（中国新聞社ヒロシマ平和メディアセンター記者）

孫賢鎮（広島市立大学広島平和研究所准教授）

ヒロシマからの発言 岡田恵美子（被爆者）

瀬戸麻由（シンガーソングライター）

モデレーター 直野章子（広島市立大学広島平和研究所教授）

第Ⅱ部は「歴史としての「戦後」を考える」と題した。第二次世界大戦終結から七〇年余りが過ぎた現在でもなお、日本では「戦後」という言葉が用いられる。これは他の国々では見られない独特の表現ともいえ、「戦後」という言葉が単なる時代区分ではなく、日本人の歴史認識やアイデンティティーと深く結びついていることを示している。本章では、「戦後」がどのように語られ、捉えられてきたか、「戦後」をめぐる言説状況の見取り図を描きつつ、「歴史としての戦後」を捉える新たな視座を提供する。なお第Ⅱ部は、広島平和研究所プロジェクト研究「戦後」の史的再考」（代表・直野章子、二〇一七―一八年度）の研究成果の一部でもある。第Ⅱ部のもとになった連続市民講座は以下のとおり。

二〇一八年度 連続市民講座「歴史としての戦後」を考える」

日時 二〇一八年一〇月一九日～十一月一六日（毎週金曜日） 一八時～一九時三〇分

会場 合人社ウエンデイひと・まちプラザ（広島市まちづくり交流プラザ）

第一回（一〇月一九日） 成田龍一「戦後日本史」の叙述をめぐって」

第二回（一〇月二六日） 直野章子「原爆被害をもたらしたもの——記憶、責任、対米意識」

第三回（十一月二日） 竹本真希子「戦後ドイツの「戦争」認識」

第四回（十一月九日） 永井均「日本人は小野田元少尉をどう見たか——フィリピン残留日本兵をめぐる語り」

第五回（十一月一六日） 河上晁弘「戦後の象徴」としての憲法9条」

連続市民講座および国際シンポジウムについては、広島平和研究所が日本語および英語の両言語で発行しているニューズレター（Hiroshima Research News）およびウェブサイトでその詳細を読むことができる。

本書が手に取ってくださるみなさんに核問題や歴史、戦争などに関する知識をもたらし、「平和の扉を開く」きっかけの一つとなることを願っている。